

# 大学における地域支援活動の実際

濱 田 さつき<sup>1</sup>・藤 土 圭 三<sup>2</sup>

## Reality of Community Support Activity in the College

Satsuki HAMADA and Keiso FUJITO

### 1. はじめに

臨床心理に要請される基本的な専門業務に「臨床心理査定」「臨床心理面接」「臨床心理的地域援助」と、これらの「研究・調査」の4種類が挙げられている（大塚義孝2004）。筆者が所属する広島文教女子大学心理教育相談センター（以下、当センターとする）は、長年、主幹である相談業務以外に、臨床心理的地域援助活動として、事例研究会を事業の一環として開催してきた。

本論では、当センターが実施してきた事例研究会活動の実際を紹介し、その中でも2006年度の1年間だけ活動した心理臨床研究会の実際の活動の様子を報告したい。

### 2. 臨床心理的地域援助とは

臨床心理的地域援助の定義について、心理臨床大事典〔改訂版〕では、「地域社会で生活を営んでいる人の、心の問題の発生予防、心の支援、社会能力の向上、その人々が生活して心理的・社会的環境の調整、心に関する情報の提供等を行う臨床心理学的行為」（山本2002）とし、以下の4つの柱を臨床心理学的行為の内容として紹介している。

#### 第一：予防対策

特に第一次予防（primary prevention）をすることであり、具体的にはストレス対処法（stress management）を身につけることである。

#### 第二：心理的支援（psychological support）

何らかの意図をもった他者の行為に対する働きかけであり、最終的には、他者のエンパワメントをはかることである。したがって、心理的支援とは、自らの生活を自らで切り開く意欲や力を獲得することを目ざした働きかけである。

#### 第三：社会的能力（social skill）の向上

心の発達促進を援助したり、社会能力を身につけるような訓練活動に従事する活動である。

#### 第四：心理的・社会的環境の調整（psycho-social environmental control）

問題を抱えた本人ではなく、その人を囲む環境側に働きかけ、環境を改善・変革することで、人と環境の適合度を増加させ、問題解決を促進させる活動である。

---

<sup>1</sup>広島文教女子大学心理教育相談センター

<sup>2</sup>広島文教女子大学名誉教授

実際の地域支援活動の内容は、子育て・教育に関する活動、不登校や引きこもりに関する活動、障害・医療・福祉に関する活動、産業に関する活動、家族に関する活動と多岐にわたる。こうした地域支援は、家族や仲間・市民の手による自然発生的なものから、既存の支援機能をもつ組織による支援まであり、公民館などの掲示板や市や区が毎月1回発行している広報紙などでその活動内容はよく知られているであろう。

### 3. 大学における地域支援活動（当センターの場合）

大学における地域支援活動も幅広く行われており、公開講座や公開レクチャーなど各々の機関によって名称は異なるものの、大学の持つ専門的知識を活かし、地域に還元するという目指すものは同じであろう。当センターでも、臨床心理学的専門性をもとに地域社会へ参画していく具体的活動として、1993年に藤土がセンター長として着任した翌年の1994年から公開レクチャーを、またその翌年の1995年から事例研究会を発足・開催してきた。当センターは、専門的知識を学ぶ場としての公開レクチャーのみならず、事例研究会の活動も重要視してきたが、その重要性については、藤土（2003）が、「地域に生きる心理臨床」の中で事例研究会設立にあたって次のように述べている。

相談担当者は、観察者であると同時に会員でもあるわけで、第二人称と言える立場にあると私は思っています。したがって、相談担当者が同業者の前に公にして、自分だけでは見えなかったものを見るという作業が必要で、これを通らない事例対応は「手前味噌」に終わってしまうと以前からずっと考えています。それで私は、転勤するたびに、その地で事例研究会を開いてきました。

鶴田（2001）も、報告者によるプレゼンテーションの事前準備段階での事例の把握と、参加者に事例を報告し双方のやり取りから事例のさらなる理解を深め、新たな視点を得られる効果を挙げている。自らの事例を客体化し、他者というフィルターにかけ、検討することの作業が、新たな視点や手立てを習得することの可能性を生み、一般科学とは違い、比較検討の難しい分野であるからこそこのような作業が必要不可欠であると考える。河合（2003）も、「事例研究においては、個々のクライアントが〈新しい〉のであり、〈ひとつの世界〉なのである。したがって、個々の場合において、それを適切に探索し記述することが必要になる。」と事例研究の意義について述べ、さらに、事例研究は心理臨床家にとって「訓練」としての意味も大きいことを付け加えている。

### 4. 当センターが実施してきた事例研究会の歴史（文教事例研究会）

ここでは、当センターが行ってきた事例研究会の歴史について簡単に紹介したい。会の名称は、「文教事例研究会」であり、1995（平成7）年から2004（平成16）年まで開催されてきた会である。対象者は、地域において対人援助職（主に教員、養護教諭、心理士関係など）に従事している方である。記録によると、年間平均回数約8回、合計70回開催されていた。内容は、事例研究だけに留まらず、会員のニーズに合わせた演習・講演会も含めた3本柱で構成されていた。会員数は、田中（2003）の報告によると、初年度は20名であった会員も2002年度の段階では約80名まで増加した。

増加の理由としては、会員からの紹介という口コミの効果を挙げ、その他に、昨今の心理的課題に対する社会ニーズの増大や大学側の資金援助による貢献が背景にあるとしている。文教事例研究会は、会員からのニーズが高かったが、被支援者の情報の取扱いにからみ発表者側の事例提供が難しくなった経緯から、2004年度をもって終了することになった。活動の詳細については、田中実香子・藤土圭三（2003）がまとめた「地域に生きる心理臨床 第4章 大学を拠点とした地域支援」を参照されたい。

## 5. 新たな活動の実際（心理臨床研究会）

ここでは、心理臨床研究会の活動の実際について紹介する。

### （1）経緯・目的：

本学大学院は、臨床心理士指定大学院として、臨床心理学の専門的能力向上を目指し、学内実習施設において実践を行った事例を検討する場としてケースカンファレンスが授業として大学院カリキュラムの中に組み込まれている。しかし、現場にでると、心理職は一人職場であることが多く、現場において大学院で実施されているようなケースカンファレンスに取り組んでいる組織はそう見当たらないであろう。さらに、専門的資質の向上の課題のみならず、亀口（2004）が指摘する、一人職場において生じるニッチ（心理的な居場所）を確保することの困難性や、その特殊性から組織内で孤立することの危険性の心理的課題も浮上してくると思われ、現場では多くの課題を抱えることになる。筆者も、大学院をH10年に修了後は病院臨床に従事していたが、所属していた病院は心理職の歴史は長い、長年一人職種が続いており、着任した時は一人であった。上述のような場の必要性を感じてはいても、臨床心理士の資格を有していないこともあり、ネットワーク不足から事例研究会のような場の確保が難しい状況が初年度は続いていた経験があった。H15年度から当センターに赴任し、修了後院生との交流の中で、筆者が心理臨床家として初心者であった頃の経験話を聞くことが多々あり、心理臨床家として従事する修了後院生が増加してきたこともあり、ソシオ教育の一環として、現場に従事する修了後院生に対し、事例研究を通して心理的支援を行うこととした。

### （2）開催するまでの手続き：

本学修了後院生に対し事前アンケート調査を行い、その結果を基に当センターが中心となって会を発足させた（アンケートの結果は本論の末尾に掲載）。

（3）対 象：本学大学院教育学専攻を修了し、臨床心理的業務に従事している方

（4）開催期間：2006年4月～2007年3月（1年間）

（5）構 造：約3ヶ月に1回、週末の午後の時間帯

（6）参 加 費：毎回徴収（資料代、茶菓子代）

（7）場 所：心理教育相談センター2階 演習室

（8）内 容：事例、講演

詳細は、次の通りであった。

## 第1回 事例発表

事例提供者：単科精神病院／心理療法士

事 例：感情の整理が上手くいかない30代男性の事例

参加人数：17名

## **第2回 事例発表**

事例提供者：大学付設心理教育相談センター／臨床心理士

事 例：対人緊張の青年男性との心理面接過程

参加人数：9名

## **第3回 事例発表**

事例提供者：公立小学校／ふれあい推進員

事 例：ふれあい推進員として不登校傾向の男児に関った事例

参加人数：6名

## **第4回 講演会**

講演者：早坂正年（仙台医療福祉専門学校保育介護福祉学科 臨床心理士）

演 題：臨床心理士資格試験受験準備についての留意点並びに心理学徒としての心得

参加人数：39名

### **(9) 設 備：**

会場となる部屋には、テーブルと机以外に部屋の縁にティーサービスコーナーを設け、参加者が自由に飲めるようにした。会終了後には茶話会用としてお菓子も用意されていた。なお、文教事例研究会では、勤務後の夜に開催されることもあり、お弁当が用意されていた。

お茶とかお菓子とか弁当など飲食にまつわる行為が研究会運営・進行にどのような意味があるのだろうか。このような行為は、心理面接場面においては制限行為の一つとされている。心理面接は、非現実的空間であり、特殊な二者関係の中で行われる。クライアントの抱える問題に向き合う時、それまで本人を支えていた手立てなり枠を取り払う必要があり、その時に制限が大きく役立つのである。飲食行為は、ともすればクライアント—セラピストとの利害関係を生んだり、クライアントの本質の問題から目を背ける手助けともなりうるのである。心理面接は、まさに心の治療が目的であるため、前述のような行為が有効とされるのだが、事例研究会ではどうだろうか。山本（2004）が、心理臨床を進めていく上で、備えておくべきコミュニティ心理学的アプローチの発想として「密室である相談室を出て、地域社会を土俵にした心理臨床の専門的援助を行うには、伝統的心理臨床の発想からコミュニティ心理学的発想の転換が必要である。」と指摘しているように、事例研究会といった地域支援活動は心の治療が目的ではなく、心理的支援を行う場であると考えられる。事例研究会での飲食行為は、エネルギー補給＝生きる力であり、その空間を他の参加者ともに共有することが疲れを癒し、集団の中でニッチ（心理的な居場所）を体験する効果を促進・援助することに役立つと思われる。

(10) 進 行：

本会は、当センターの相談員が司会進行役として会を進めていた。簡単に発表者の紹介を行い、その後は発表者主導のもと用意されたレジュメに沿って事例についての紹介が行われた。事例の紹介後は、一旦休憩を取り、その間に参加者はトイレを済ませたり、飲み物の補充を行ったり、メンバー同士で話をしたりと各々自由な過ごし方をしていた。休憩後は、再び司会進行役にバトンが手渡され、フリーディスカッションの形態を取っていたが、急に自由な発言とまではいかないようで、沈黙の時間が続くことがある意味定住化していたため、司会より一人ずつ感想や質問等を伺う形式で進めていた。会も終わりに近づくと、当時センター長の藤土よりコメントが寄せられ、それを受けて交流が盛んになることもあった。会終了後は、茶話会が開かれていた。

また、年度の最後にはH17年度まで本学心理学科にて助手として勤務していた早坂氏を招聘し、臨床心理士資格試験をテーマに講演会を実施した。本講演会のみ対象者の枠を学部生まで拡大したこともあり、約40名の参加となる。

(11) コメント：

研究会終了後日、アンケートを送信し、会の運営についての意見や参加しての感想を求めた。その内容の一部を紹介する。

〈Aさん〉

研修では、普段見聞きしない事例の内容に、やる気をもらって帰りました。(中略)先生方の観点や若い方の新鮮なご意見が聞けて嬉しかったです。これからアレコレ言える会になっていくといいですね。

〈Bさん〉

事例研究をする機会がなかったので、こういう会が発足したことを嬉しく思っています。

〈Cさん〉

現場に出て勉強したいと思いつつも出来ない毎日が続いておりましたので、このような機会を与えていただき有り難く思います。

〈Dさん〉

クライアントのことだけではなく、セラピストの動きを詳しく出してくださいと、私のような新米にはセラピストとしての初歩的な勉強の確認ができて嬉しいと思います。(中略)実際に、クライアントさんと接していると、分からないことだらけで不安に感じています。

〈Eさん〉

今回は、初めての会ということで、初対面の人も多く、発言しにくかったと思うので、マイクをまわしてもらったことで発言できたという面があったと思います。(中略)私たち新人修士生は、何も分からないから発言できませんよね。だから先輩方の意見を聞くのも有意義だと思いますが、分からないなりに発言させてもらえる機会があるのはありがたいです。(中略)ただ順番に感想などを言っていると、意見につながりができないし、深まらなかったですね。せっかくレ

ポートをまとめたのですから、問題点など柱を立ててそれについて意見を出し合うようにしたら深まりも出て、手土産を持って帰ることができたのではないかと思います。

〈Fさん〉

参加して良かったです。発言の機会を与えていただき、大変ありがたかったのですが、強制的に話さなくてはいけないという点で、答えにくい部分がありました。できれば、次回からはマイクは回さない方が有り難いと思いました。

〈Gさん〉

参加して勉強になったが、運営については、自主性にまかせ、活発な意見交換が可能かと言われると、わかりませんが、何か一言は言って帰るといふのをおさえて、一度自主性に任せてみて、再度検討してみてもいいかなと思いますか？

〈Hさん〉

先日は、有意義な時間を過ごさせて頂き有難うございました。事例提供者としては全員の意見を聞きたいと思うのですが、正直なところ、マイクが強制的に回ってきたのはしんどかったです。強制にせずとも、本当に意見がある場合は出てくると思うのですが・・・。

〈Iさん〉

会の運営方法はよかったと思います。うまく発言することはできませんが、事例研究をする機会がなかったので、うれしく思っています。事例研究中心での研究会いいと思います。

## 6. 研究会を1年間開催して見えてきたこと

ここでは、参加者からのコメントや筆者の体験も交えて、1年間開催して見えてきたことについてまとめてみたい。

### (1) 学びの場として

時代や環境の変化に伴い、浮上してくる課題も変化してくる。近年、現場で抱える課題は複雑化・深刻化するケースが増加しており、一人に対処することが困難なケースを抱え込むことも少なくなく、結果として危険性のリスクも高くなる。支援者側は、自らの支援の方向性の再検討を求められていることに気づくのであるが、「これではいけない」「もっと勉強したい」「新たな風を起こしたい」と思っても、日常的な現場の対応に忙殺され、なかなか対応を振り返る時間的・心理的余裕がなく、つい馴染みのやり方で支援してしまうのが現状のようである。参加者の多くは、心理的支援に関する専門的知識の不足を感じていたようである。講義式という受身的だけではない、事例提供という能動的な参加の仕方が机上の空論に終わらない現場に必要な知識やスキルを学ぶ場として役立てることができたのではないだろうか。また、フロアとして他の参加者の支援方法も学ぶことも新たなスキルを獲得するのに役立ったようである。

### (2) ネットワークの場として

事例研究会では、学校、相談機関、医療機関など異なる組織に所属する心理職が参加していたこともあり、他の機関の機能性についてや心理職の位置付けをクリアに把握することが可能となり、

事例によって協力体制を築いていく上でネットワークの存在は情報を共有することで、支援のあり方に幅や柔軟性を持つことが可能になったと考える。

### (3) 自分の癖を知る機会となる

研究会は、日常の作業から離れて、ある意味「非日常的空間」に身を置くことができる「場」と思われる。そして、事例をまとめ、やり取りの作業を披露することは、同時に私という「個」を披露することになり、否が応でも自分自身を意識する機会となる。それは、自己の支援のあり方の癖を知る機会ともなるのだが、これまで身につけてきたしがらみを脱ぎ捨て新たな視点や技法を獲得するにはこの作業は不可欠と思われる。

### (4) 心の拠り所の場として

参加者の多くが所属する教育現場や医療・福祉機関等では一人職種であり、心理的な居場所を確保することが難しい。そういう中で、研究会を安心して本音で話することができる場として感じており、語ることを支えてもらう体験が、心の拠り所・癒しの場として位置づけられていると考えている。

### (5) 参加人数の不安定さと参加者層の偏りについて

事前アンケートの結果から、会の開催については好意的・積極的な反応が伺えたが、いざ蓋を開けてみると、回を重ねるごとに人数の減少が目立つ結果となる [5-(8)を参照]。所属先によって勤務体制にばらつきがあるため、メンバー全員の希望曜日・時間帯での開催とは行かず、勤務時間の関係・他の研修会とのブッキングなど時間的問題から参加を断念したメンバーも存在した。また、ある程度の臨床経験を積んだ臨床家になると、参加の意志はあってもそれぞれの理由で広島を離れた方や子育て中の方など物理的問題・家庭の事情などといった個人を取り巻く環境の変化により参加が難しいようであった。しかし、はたしてそれだけであろうか。参加者の臨床経験を見てみると、大学院を修了したて、もしくは修了後2～3年と臨床経験が5年未満の新人臨床家が大多数を占めていた。ある程度の臨床経験を積むと同業者の横のネットワークが充実し、情報などで事例研究会のような場の確保が可能となり、またスーパービジョンを受けるなどすでに拠り所が存在している。心理的緊急性が伴わないこともあり、現存する拠り所からさらに研究会を増やしていく場合は、それ以上に魅力的な場であることが求められると思うが、そこまでには達していなかったのであろうと考える。

### (6) 進行について

参加者全員にコメントを求めることについては、ほぼ全員が強要性を感じていた。分からないなりに発言することの重要性を感じた参加者もいたが、大半が会の進め方の修正を求め、参加者側の主体性に委ねてみてはどうかという意見であった。進行については、前研究会（名称：事例研究会）と同様であったが、前研究会とは大きく反する結果となった。前研究会は、養護教諭・教諭といった学校関係者が多く、職業柄か全員が発言するシステムに慣れていたこともあってかさほど違和的な発言は見受けられなかった。対象が変わると同じ進行方法であっても感じ方は違うことを学んだ。また、ただ単に感想や意見を問うのではなく、問題点などをクリアにしていく方がより深い意見交

換に繋がったのではないかという点については進行系の力不足な点であり、修正すべき点と考えている。

## 7. さいごに

当センターが主体となって開催してきた心理臨床研究会の取り組みについてまとめた。事例検討については3回のみの実施となったが、参加者それぞれが事例の理解を広げる場として、情報を共通する場として、また自分を振り返る場として、心の拠り所として活用できたのではないかと考えている。当センターが担ってきた役割は、山本（2002）の指摘する4つの臨床心理学行為のうちの心理的支援（psychological support）に当てはまると思われるが、参加者の支援のあり方の幅が広がったことで、結果を焦ることなく安心して目の前のクライアントの声に耳を傾け、柔軟な対応が可能になったようである。参加者の多くが新人臨床家ということもあり、基礎基本の不足や支援のあり方として模倣の段階であることを把握することができた。また、会の進行についても文教事例研究会では受け入れられてきた行為が、心理臨床研究会では難色を示されたりと主催者側として困惑することもあるが、対象が変われば支援のあり方が変わるのは自然である。心理臨床研究会は、事実上1年間の活動となり、現在は休止している。センター長の交代などの主催者側の問題もあるが、参加者の減少やコメントから会そのものの存在は好意的だが、中身がニーズに合わない側面が大きいのではないかと考えている。藤土が常日頃から口にして「手土産を持たせる体験」が伴っていなかったため、モチベーションが低下したものと思われる。会を進めていくに当たっての運営のあり方について再検討する必要性を感じている。主催者側・参加者側の相互の質的向上に向け、どのような方法が有効であるのか試行錯誤していきたい。

## 文 献

- 大塚義孝 2004 心理臨床大事典〔改訂版〕培風館 pp. 24
- 亀口憲治 2004 心理臨床大事典〔改訂版〕培風館 pp. 1124－1126.
- 藤土圭三・秋山幹男・中丸澄子・小早川久美子（編） 2003 地域に生きる心理臨床 北大路書房，pp. 181－216.
- 鶴田和美 2001 心理臨床家のための「事例研究」の進め方 pp. 86-87.
- 河合隼雄 2003 臨床心理学ノート 金剛出版 pp. 64－76.
- 山本和郎 2004 心理臨床大事典〔改訂版〕培風館 pp. 1128－1129.

# アンケート

- 1.【開催日時】参加して下さるとしたら、第何週の何曜日の何時がご都合がよろしいでしょうか。
- 2.【開催時間】1回の研究会の時間を、平日の場合は2時間ないしは3時間、日曜の場合は半日と考えておりますが、いかがでしょうか。ご意見ください。
- 3.【開催頻度】1ヶ月に1回、もしくは2ヶ月に1回程度開催したいと考えておりますが、どう思われますか。
- 4.【研究会の内容】研究会の内容について腹案がございましたら、コメントください。

## アンケート結果

番号	開催日時		開催時間	開催頻度	内容
	第1希望	第2希望			
1	第2土曜 14時 第3土曜 14時		2～3時間	1ヶ月に1回	・ケース検討 ・テスト施行のスキルアップ ・情報交換
2	第1金曜 19時 第2金曜 19時	木曜 19時	2時間		・事例検討を通して学ぶ(インテーク・見立て・終結などがあっても良い)
3	土曜 18時	日曜 10時			
4	月・水・木・金曜 18時30分～ 土曜 9時		2時間～2.5時間	1ヶ月に1回	・事例検討 ・勉強会(発達障害、虐待、精神科病院の抱える問題等) ・現場での悩み
5	第2土曜 15時	第3土曜 15時	平日なら2時間 土曜なら3～4時間	月2回	・アセスメント ・集団療法 ・事例
6	土曜	日曜			
7	第2日曜 13時	第3日曜 13時	日曜午後半日	2ヶ月に1回	・事例検討(もし1日であれば、午前講義、午後事例検討)
8	第1・2・3 土曜 14時	日曜 午前 日曜 13時30分	2～3時間	2ヶ月に1回	・事例検討 ・心理検査の査定、解釈
9	第1土曜 10時	第1日曜 10時			
10	土曜		2～3時間		・事例研究など
11	木曜 18時	日曜 13時		年に8～9回	・それぞれの専門分野からの事例提出と検討(情報交換の場になるのでは)
12	金曜 18時	土曜 18時	平日なら2～3時間 土曜なら半日		・事例検討
13	土曜				
14	日曜			1ヶ月に1回	
15	第4土曜 9時	第1土曜 9時	3時間(頻度による)	2ヶ月に1回なら負担なし	・心理検査や技法など1つのテーマに添った事例の話し合い
16	日曜	平日なら18時から	日曜はいつでも可 平日なら2時間	2ヶ月に1回	・事例 ・アセスメント
17	土曜 14時～17時		ケース検討 14時～16時 情報交換等 16時～17時	2ヶ月に1回	・事例検討
18	土曜 10時	土曜 13時	2時間	1ヶ月に1回	・事例検討
19	土曜 10時	日曜 13時	2時間	2ヶ月に1回	・事例検討
20	第2水曜 午後	日曜 午後	事例検討で2時間は少ないように思う	1～2ヶ月に1回	・話題提供者も参加者も、その会に参加することで元気になれるようなものを希望
21	土曜 13時30分～	日曜 9時30分～	半日	1ヶ月に1回、2ヶ月に2回 のどちらでも良い。	・遠方や都合で参加できなかった会など、研修会の内容が冊子になれば勉強に役立つと思います。現座の事例などを聞かせてもらえたらと思います。
22	第3日曜 10時～	第2土曜 10時～	休日開催であれば半日	2ヶ月に1回	・主催者にお任せいたします。